

---

# 泡沫の夢に伏し

六

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

泡沫の夢に伏し

### 【Nコード】

N3349R

### 【作者名】

六

### 【あらすじ】

生まれながらに体が弱い僕は病に伏し、外に出ることも遊ぶ事もできずに外を眺めていた。

そんな、時。彼女は奇跡のように、僕の目の前に現われた。

ネギま！二次創作物。オリジナルキャラが登場します。

見切り発車の執筆なので荒多し。

## ぶるるーぐ

それは、いつの事だったか僕はもう覚えていないが、彼女との出会いは運命なんて言葉では語る事も出来ない、取るに足らない事だった。いつもどおりに始まり、いつものように終わる日々に彼女は突如として現われた。

運命なんて壮大な言葉なんていらない、運命如きでは表する事もできない出会いだった。

「　　なあなあ、なにしてはるん？」

「僕は、なにもしないことをしてるんだ」

「？」

縁側に腰掛けて外を見やる僕に突然彼女は話しかけてきた。どうやら父の客人の子だったようで、難しい大人の話に飽きてこんなところに来て来たようだった。

場所は僕の家で、大きな武家屋敷であった。

京都である。関西呪術協会本部からは少し離れた場所にその家があった。関西呪術協会本部には調子の良い時に何度か言った事があるが、なんか凄いとしか言いようがないほど立派な場所だったが、それに比べて僕の家も一戸建てとしてはなかなか立派な家だと思っている。庭もあるし、池もある。門だつてなかなか大きい。これほど大きな家なんだから、うちの一族は関西呪術協会では重宝される一族だと推測できる。

「よーわからんなあ。それっておもしろいん？」

「んー、少なくともおもしろくはないかな」

そう言う彼女、不可解と小首を傾げていた。

「んじやなんでそんな事してるん」

「これしか出来ることがないんだ」

彼女との出会いがなければ、僕はきつと世界を呪っていたに違いない。

生まれてから病弱だった僕はいつも布団に横たわり、家の中から  
でる事は殆ど出来なかった。

「お主は、治す事が出来ん」

「そうですか……」

「こちらにも全力を尽くすが、しかし期待は出来んだろう」

気管系に欠陥があるらしく、根幹的に治す事もできず進行を遅らせる事が精一杯なのだ、治療に訪れる符術師は容赦なく僕に言い放った。きつとそれは病に対し生涯向き合い続けなければならない事を伝えたかったようで、その表情は仏頂面をさらに重苦しく顰めさせ、言った事を悔やんでいるかのようだった。

人の表情から意図を読む事は得意だった。僕は僕がいることに多大な申し訳なさを感じていたのだ。唯一の跡取り息子である僕の体が弱いから父はいつも治療できる人を探していたし、母は僕には隠れて良く泣いていた。それでも僕の前では気丈に振舞うのだから、僕が生きる事は誰かの迷惑にしかないのだと理解していた。

それでも彼らの前ではそれを誤魔化そうと、一生懸命期待には応えてきた。時たま訪れる医者の治療には耐えてきたし、母の迷惑にならないように我儘を言わない事にした。父が医者探しに奔走しないようになるべく健康そうに振舞った。

でも、そんな僕を見て皆は悲しそうに顔を翳らせるのである。なんでこの子が、と母は僕を抱きしめて泣いたし、父は無言で呆然と佇んでいた。僕には父や母の絶望の程が良く理解できなかったから、それを黙って受け入れたのであった。

「そうなんかー」

「そうなんだー」

「だったらうちと遊ばん？」

僕のわけの分からない言葉に彼女はきつと理解を放棄したのだらう。隣に腰掛けてきた。

「なんで？」

「だって暇なんやる？」

「むっ」

そう言われれば、確かにそうなのだが。

「お父様もよーわからんお話しとるし、うちも暇なんよ。おとなてなんであんなおもしろーないお話しばっかするんやろ？」

「それが大人つてもんじゃないかな」

「そうなん？」

「そうなの」

僕の答えに彼女は「なるほどな」と理解していないのかはたまに納得したのか、腕を組みながら偉そうに胸を張り頷いていた。

「んで、どないするん？」

「ん？」

「遊ばないん？」

彼女は僕が断るだなんて全く思っていないような、キラキラとした笑顔を見せて僕に言った。それを見て僕は迷う。

恥ずかしい事に、僕は彼女が家に来るまで同年代の子供と会うことが無く、どのように対応したものか迷っていた。何せ殆ど家から出ないものだから、子供と会う機会なんてあるはずも無く、遊ぶ事すら皆無であった。だから、こういうお誘いは初めての経験で言葉に詰まったのである。

「……」

「なあなあ、うちと遊ぼうやあ」

どうしたものかと悩んでいると、彼女は僕がただ黙っているだけだと思っただのか催促に頬を膨らませた。そんな彼女を見て、これが子供なんだと改めて思い、そしてそんな子供をどこか他人のように思う子供の僕はなんとも異常だと、苦笑を漏らすのだった。

「んじゃ、どうする？」

「え？」

「遊ぶんでしょ？」

「！うん、そうや！んなら、何しよか！？」

格好の遊び相手を見つけて彼女は嬉しそうに笑った。

僕の手を引いて、縁側から降りる。体が弱いから激しい運動なんて出来るはずないけど、でもこの時ばかりは、僕は少しだけ無理を試してみたいと思った。

そして僕は始めて遊ぶという事に、心密やかに期待を抱くのであった。

「そういえばさ」

「なん？どないしたん？」

「君、名前知らないんだけど」

そう言つと彼女は「そういえば、そうやったなあ」と暢気に構え。

「うち、葛葉刀子かなめみかげいうんよ。あんさんは何ていうん？」

「僕は要御影」

そうして、僕達は出会った。

こんな何気ないどこにでもある、まるで取るに足りない出会い。

運命なんて呼ばせない。そんなちやちな言葉じゃ語る事も出来ない。物語のような悲劇も、喜劇も存在しない。

奇跡のように、僕達は出会った。

## ぶろろーぐ（後書き）

始めての方は始めまして。月姫で知っている方はこんにちは。現在月姫オリ主もので執筆をしている六と言います。

今回たまには違うものを書いてみようと思い、ネギまもの一つ書いてみました。あちらがシリアスなので、こっちは柔らかいものを書いていきたいです。

にしても京都弁難しい……。

## 第一話

最近外は騒がしく、家の中に溢れる使用人から聞くところによると、遠いところで戦争が起こっているらしく、その余波が京都にも及んでいるとか。確かに庭先から見える京都の街並みはどこかピリピリしていると言うか、ささくれ立っているような気がする。そう言えば青山家の男が一人その戦争に関わっているとか。

しかし、そんな遠いところの戦争で京都が巻き込まれていると聞けば僕としても忸怩たる想いである。あまり外に出ることもできない僕であるが、高台にある我が家から見える京都の街並みや雰囲気は実に緩やかで気風も良い。言ってしまうえば好んでいる。そんな都が戦火に炙られているのだから内心穏やかではないと言うもの。でも、僕にはそれをどうにかできる力はないし、あつたとしても要の名前ぐらいだろうか。

そんな訳で僕はいつもと同じように縁側に腰掛けて外を眺めるのであつた。

「ほう……」

湯飲みを傾けて香ばしい香りを楽しむ。うむ、今日も生きてる茶が美味い。

このお茶はどうやら有名どころから取り寄せたものであるらしく、使用人が客人向けに淹れるものである。それをくすねて自分で淹れたのであるが、なかなか上出来ではないだろうか。茶の作法なんて気にしていないし。これで茶菓子があればいいかと思われるが、別にそこまで望んでないのでどうでもいい。



「今日もいい天気だなあ」

のほほんと日和は上等。実にいい天気である。

「にしても……」

意外な事に、はたまた展開的には正しいのだろうが、僕と葛葉刀子との関係は実に簡素な所から始まった。向こうは客人の子供と言っただけで、そも要と葛葉にはさしたる関係がないのである。いや、父親同士が戦仲間となかなかエキセントリックかつエキゾチックな関係であると聞いたことがあるが、しかし言ってしまうえばそれだけの話である。

だからこそ葛葉刀子は来ない。彼女との出会いから実に一ヶ月経っているが、あれから彼女と会っていない。別に望むべく関係ではなかったし、僕自身は実にどうでもいい事である。むしろ彼女こそ僕のことなんてきつとどうでもいいのだろう。何せたまたま出会っただけの二人である。

「はあ……」

しかし、どうにも彼女との時間を忘れる事が出来ない。始めて会った自分と近い歳の子供なのだ。友達ではないとは言え、どうにも気がかりなのだ。印象的とも言える。なんで髪が金髪なのかとかもまあ疑問と言えば疑問であるが、別にそこは突っ込まなくてもいいことではないだろうか。

「まあ、もう会うこともないだろうけどね」

苦笑と共にどこか諦めている自分がいる。諦める事には慣れていく。何せ期待するようなこともないのだ。病気が治る事も、自分の未来にも。また要家の宿命にも。そんな人生、そんな子供である。何を期待すればいいのか。期待するだけ落胆する事は目に見えていくのだ。だったら、始めから諦めていた方がまだマシというもの。ただ、こんな事誰にも言えないことだが。

「はあ……」

しかし、あれからと言うものの溜め息が増えたような気がする。意識しているわけではないが、自然と溜め息を吐いている自分に気付くが、如何せんどうしようもないのだ。

「うん、どうでもいいか」

自分の事なんて、どうでもいい。

お茶を飲み干して立ち上がる。実は今日は用事があって関西呪術協会本部に行かなければならない。無論僕一人ではなく父に連れ立つてである。久しぶりの外出だ。実に半年振りくらいだろうか。前回も関西呪術協会の用事で出向いただけなのだから、物悲しいものである。

「やて、と」

懐かしき外の空気でも味わってこよう。

体が弱いと言う事で外出に当たって僕には幾つかの約束事がある。

勝手にどこかに行かない事。

一人で出歩かない事。

知らない人にはついていかない事。

神鳴流を最低一人側においておく事。

上三つは普通に思われるが、文字通りに受け取ってはならない。

自分で言うのもなんだが、僕の親はどうしようもなく過保護である。他の過保護を僕は知らないが、少なくともこればかりは胸を張って言えると思う。あの親はんぱネエ。僕一人のために神鳴流をつけると言う制約を冗談抜きで語っているのだから阿呆みたいである。要家の格式を考えればこれが普通なのだろうか。

「そこんところどう思う青山さん？」

「いやあ、御大も無茶をいいなはるわなあ」

「ですよねえ」

そんな訳で僕の護衛に京都神鳴流の宗家である青山がついているのであった。ちなみに今僕の護衛についている女性と僕は父から少し離れて会話をしていた。実はたまにある外出には必ずこの人が護衛についてくるのだった。

「そういえば、青山の方は大丈夫なの？」

「そうやなあ。詠春はんが気張って外国に行つて、んで神鳴流の出番が増えてますけど、まだ御影はんの心配するような事はないですえ」

「まだ、ね」

やっぱりちよつと大変らしい。

大きな戦、なのだろうか。最近東との関係もきな臭いらしいし、

父は東が嫌いだから文句ばかり言ってる。そこんところやっぱりど  
うなんだろう青山さん。

「御影はんが思うような事はないと思いますけど、向こうのほうで  
小突きあつてるらしいなあ。ほんに関東は無節操や。あ、これは内  
緒ですえ？」

面倒くさいと声音から伝わるが、その表情からありありと関東に  
対する悪感情が見えていた。確かに伝え聞くところによると関西と  
関東は仲が悪いようで、何かあるにしろいざこざが繰り広げられ  
きたらしい。実に迷惑な事である。

「ああ、そういえば」

「うん、どうしたのさ？」

「最近うち所の娘が神鳴流習い始めたて話、前しましたやる？」

「ああ、そういえばそんな事もあったなあ」

友人のいない僕である。しかしその代わりと言わんばかりに客人  
は殊多い。要家の人間だからかそういう事には事欠かないのだが、  
外に出れない僕を思つてなのかどうかは分からないがこの人は良く  
家に足を運んで僕の話し相手になってくれる。月に二度ぐらいだろ  
うか。足蹴く通つてくれるから正直ありがたい。要と青山はどうに  
か釣り合いの取れる家同士だから、体裁ぶつて顔を見せる人たちと  
比べたらその関係性は雲泥の差と言うもの。年齢差はあるものの気  
兼ねなく話してくれるこの人の存在は僕を大いに助けてくれる。

「それでその娘さんがどうかしたの？」

「いやなあ、最近良い稽古の相手見つけはつたようでめきめきと腕  
を上げてきたんやけど、御影はんも一度見てくれへん？」

この人には僕より年上の子供がいるらしい。話を聞いた限りでは確か四歳ほど上だろうか。この美貌で一児の母というのも仰天であるが、今しがた言われて思い出した。しかし、青山さんの娘なのだから神鳴流を習うのも当然か。

「えーと、なんで？」

「たまには違う誰かに見てもらうのもええ刺激になりますやろ？」

「そんなもんなのかな？でも僕神鳴流とかよくわかんないけど」

「ちやうちやう。普段一緒におらん誰かに見られる事が肝心なんよ」

「そういうものなの？」

「そういうもの」

素人目に見られたって良くわかんないだろうけど、そこはやっぱり素人の意見だ。達人の言う事は正しいのだろう。

「まあ、暇があればね？」

「んなら今日暇やろ」

なんでぞ。

今日は用事があって外出をしているのであって、暇だから外出しているのではないのだが。そう言うとき青山さんはにんまりと意地の悪い笑みを見せるのであった。

不審に思い声をかけようとすると、僕達は何時の間にか関西呪術協会本部の長い階段へと差し掛かったのであった。

ここで暗黙の了解のように、父は一度僕に振り返り無言で足を置いて背中を向けた。僕は体力がないのである。体力のなさでは右に出るものがないくらい体力の無さには自身がある。関西呪術協会ま

での道のり、およそ二十分も無い道のりで僕は少し息切れをしている。どんだけだよ。

「ありがとう、父」

「ん」

そんな僕にはこの長い階段は苦痛以外の何物でもない。いや、普通に健康なやつでも嫌だろう。なんでこんな長いのか意味不明だ。もっと短くしろ。

だから、僕はここに差し掛かるたび父の背中のお世話になっているのだった。

「ほんに御影はんは軽そうやなあ」

「実際軽いんだよ」

父の背中におぶられながら、青山さんの言葉に少し恥ずかしさを覚えるが、そこは知らん顔で対応する。しかし、そんな僕を見て青山さんはニヨニヨと笑うのだった。

そんな僕達に父は無言で階段を昇る。関西呪術協会まであと少し。

「そういえば、青山さん。娘さんの名前はなんていうのさ」

「ああ、いってなかったとすなあ。鶴子いうんよ」

第一話（後書き）

恋愛とかどうやって書けばいいんやろ。

## 第二話

「私は用事がある。お前は青山といなさい」

この言葉で分かったのだが、僕が外出をしなくてはならなかったのはどうやら青山さんの要望があったからのようで、青山さんの言葉は本当にそうだったらしい。確かにあの人に合わせなければならぬのだから、暇と言えば暇である。遠ざかる父の背中に少しばかり文句を垂れながら、僕は青山さんについていった。

「どこに行くんですか青山さん？」

「道場のほうですえ。今そこで子供たちが鍛錬してるんよ」

「へー」

返事が味気ないのにも興味を覚えていないからである。京都神鳴流は陰陽術と合わせて京都守護には欠かせない流派だ。前衛の神鳴流と、後衛の陰陽術に合わせる事で戦術を立てているのだが、無論神鳴流は単体だけでも厄介である。京都神鳴流は一对一ではなく多数を相手に戦う事を前提に、しかも人外を相手取る戦闘集団なのである。そんな彼らが強力でない筈が無いのである。

そして今僕の護衛を勤めている青山さんはその宗家であり、いわば神鳴流の頂点であり、ぶっちゃけめちゃ強い。僕のみを護衛するにはあまりに強力な彼女であるが、そこは要家。父もしくは一族の力によるもの。そんな人に護衛をされているのだから神鳴流に感謝している。感謝はしているが別に興味は覚えていない。暴力とか嫌いだし、運動できないし。

「御影はん、道場にいくのは？」



「初めてだね」

「あらま。ほんならいい機会ですえ。神鳴流の稽古楽しみにしておくれやす」

楽しみも何も、元々興味が無い。僕は戦闘には参加することも将来的に考えて無理っぽいので、将来とか考えないようにしている。神鳴流に対してはなんか凄いくらいとしか認識していないが、その重要性は理解している。そこらへんは要家で色々と教わっていたし。

しかしそんな僕に青山さんは何を思ったのか、僕の手を握ってくるのだ。

「なんですか青山さん」

「んー、なにが？」

分かってて聞いているのだから質が悪い。青山さんはこういうところがある。何というか意地が悪いというか、楽道家と言つか。兎に角困った人なのである。

「手」

「ああ、なるほどー。これ？」

僕に向かって青山さんは笑っていた。どこか確信犯めいた目である。

「だって御影はん。こうせな逃げますやろ？」

「むっ」

逃げはしないが、しかし信用がないのか？

「信用はしてますえ？」

「んじゃなんで？」

「手繋ぎたいからつないどるんよ。あかん？」

そう言われれば、何もいえない。卑怯である。これで嫌だといったら僕が悪者にしかならないではないか。

「……むっ」

そんな訳で僕達は長い廊下を一緒に歩いていくのだった。恥ずかしい事に手を握りながら。

「征つ、征つ、征つ！！」

道場の中は熱気がむんむんとうつとおしい。そこで数え切れないほどの人が竹刀を揮っている。子供も大人も関係なく竹刀を打ち合っつて己を高め、太刀筋を鋭化させようと苦心していた。こここそ京都神鳴流本道場である。

「ほー」

そして僕は道場の熱気に感嘆の気持ちを抱いていた。

竹刀の素振りを行っている一団があるが凄まじいの一言である。集団で同じ行動、一糸乱れぬ太刀筋等も凄いが、僕はその集中力に凄みを感じた。一心不乱に竹刀を打ち、汗を拭う事無く真剣たる表情で励むその姿は寧ろ鬼気迫ると表現したほうが相応しいような。少なくとも僕にはあんな事無理である。きっと竹刀を持つことも出

来ないだろう。

「御影はん。どうです?」

「うん、凄い」

横にいる青山さんが尋ねてくるが、僕はそんな言葉しか出てこなかった。

不思議ともっと見たいと思う。

「きてみてよかった?」

「……うん、そうだ、ね」

興味は持っていないが実際に見てみるとなんだか良い。元から好意的に思っていたのだからアレだが、なんだろう言葉にしがたのような感情が胸の奥を熱くさせた。

「よかったなあ。要の御大の狙いもばっちりや」

「父?なんで父が」

「御大、心配してましたえ?御影はん最近溜め息ばかりついてるて」

青山さんに言われて驚いた。まさか父が気付いているとは思っていなかった。僕だつてやつとその事に気付いたのだ。それなのに父が気付いているなんて。

「御大は何でもお見通しなんよ?じゃなきゃ要の御大足りえまへん」

「そっかあ……」

「それやから、気分転換にて御影はんを頼まれたんよ。んで今日はそのためにも御影はんは外出した、と言う事ですえ」

「……はは」

まさか、そのために外出が出来るとは思ってもみなかった。何せ要家は過保護ばかりなのだ。苦笑と共に、父を心配させていた事への申し訳なさ。

「もちろん、うちも心配しとりましたよ？」

「……ありがとう」

目の前でそんな事を言われるのはなんだかむず痒いものだった。

「んじゃ、いきますえ？　あ、でもその前に大事があつたわ」

そうしてそのまま青山さんは。

「皆、注目っ！……！」

馬鹿でかい大音声を道場一杯に響かせた。無論そんな事するなんて夢にも思っていなかった僕はその被害を受けて耳の鼓膜がびりびりと痛んだ。うぼあ。

そして凄い事に青山さんの声でアレだけ集中していた皆の動きがピタリと止まり、青山さんへと挨拶をした。

「ここにおわすは要家ご長子要御影様であるっ！！皆の励みを賢覧するためご足労をかけられた！！皆っ、不断の努力を存分に御影様へとお見せしろ！！では、始めっ！！！！」

「……っ！！！！」

するとどうだろう、先ほどとは比べ物にならないほどの熱気で神鳴流の剣士たちは打ち合いを始めたではないか。

「……青山さん。引き合いにださないでくださいよ」

「なんの事でっしゃるうなあ？うちはただ本当のことを言っただけやす」

「……なんだかなー」

「さて、娘はどこやるうなー」

恐るべきは要家の名、と言う事だろうか。先ほどからなにやら視線は感じていたが、なるほど、一変して多くの視線を感じるようになった。そも僕は家から出ることが殆ど無いので公式の場に姿を見せることもない。そんな僕が青山さんの側にいるのだから不審に思う事だろう。それで判明したのが要家の人間なのだから慌てるに違いない。良くも悪くも要家とは関西呪術協会において欠かすことの出来ない家なのである。欠かすことが出来ないとは代用が効かないと言う事であり、代用が効かないとはそれほど重要な家ということである、らしい。ぶっちゃけ青山よりも上、少なくとも近衛家と同等ぐらいはあるとか。そりゃ熱も入る。僕は自分の事ながら要家のことをどこか他人行儀に感じていた。

「あ、おりましたえ」

そして暫く僕が望まぬ形で視察をしている風な足取りで青山さんの後をついていると、どうやら自分の娘を見つけたようだった。その一団は試合形式で二人の人間、大人子供関係なく打ち合っていた。大人に立ち向かうとかすげえ事なんだが、これには神鳴流の腕の他に気とか言う反則的なエネルギーみたいなものが関係するのであるが、これにより大人に混じって子供も共に訓練が行えるとか。ちなみに僕には気とかない。あつたらこんなに病弱じゃないだろう。ちくせう。

そして青山さんが指し示す場所に目を向けると、そこには二人の少女がいた。

一人は黒髪の女の子。真剣であるがなにやら楽しげに竹刀を打っている。

そしてもう一人は。

「あ」

金髪の少女、葛葉刀子であった。

「あの黒いのがうちの娘鶴子やす」

二人は組み手の稽古をしているようで先ほどから激しく打ち合っている。同じ子供とは思えぬ動きである。僕なんかが打ち合ったら一秒で死ぬだろう、それくらい凄い踏み込み、太刀筋、体裁きだ。

「はっ！」

「はあああああっ！」

両者鬼気迫る攻防を繰り返していて、その様は大人顔負けだ。そしてどうやら青山鶴子が葛葉刀子を若干上回っているようで、次第にはあるが葛葉刀子が押し込まれている。なんだろうか、純粹に青山鶴子のほうが体格が少し大きいというものだろうか。女の子同士であるが、青山鶴子の方が年上であるからゆえなのか、理由は分からない。葛葉刀子の歳も知らないし。

そして。

「えいつ！...！」

どうにかして、葛葉刀子が吹き飛ばされた。

「きゃああああ!？」

そのままごろごろと葛葉刀子は転がっていき、やがて壁へとぶつかっていった。

いや、どれだけ強いんだと、内心突っ込んだ。

「あれ、大丈夫なの青山さん」

若干、というか結構ひくぞアレ。

「あんなもん日常茶飯事ですえ?」

え、僕がおかしいのか?

そして周りを見てみると何事も無かったように稽古は続行されている。あんなもん衝撃に値しないと言わんばかりに。これは僕が変わっているのか、それとも神鳴流が凄すぎるのか、ともかくその感性はかなりの隔たりがあるようだ。

兎も角、そのままにしておくにはアレなので、僕は壁に頭から突っ込んだ葛葉刀子の側に駆け寄った。打ち所が悪いのか彼女は「きゅー……」とか言っていたが、どうやら怪我らしい怪我は見えなかった。しかし、気を失っているのかこれは?

「ねえ、青山さん。どうしたら……」

いいんでしょう。

振り向きながらそう言おうとしたら。

「じーーーーー」

目の前に、なんかいた。

青山鶴子である。彼女はちょっと汗ばんだ顔を僕のまん前に近づかせ、なにやら僕を凝視していた。

「えと……」

さすがに、これは戸惑う。後ろを振り返れば顔面とはこれいかにいつもなら驚くこともないのだろうが、こんなまじかに子供の顔がある事は始めてでどう対応すればいいのか困った。しかし、そんな僕なんて知った事かと彼女はじろじろと僕を見つめて、一言。

「あんさん、ひ弱やなあ」と言った。

「「「なああああああーーーーー」

聞き耳を立てていた人達大いに焦る。顎まであんぐりと上げて、かなり仰天したようだ。確かに初対面の人から言われるのは驚くに値するが、しかし何もそこまで、と思った。ただ青山と要の家柄は格式的には立場上とんとんではなく、寧ろ要の方が重要視されたりするのだから、この物言いはあまりに失礼と取られたのだろうか。ただ青山鶴子が言ったのは事実なので、僕としても苦笑するしかないのであるが。

「何がおかしいん？」

「あー、目の前でそんな事言われたの久しぶりだから」



少し前まで要にいちやもんつけてきた者が影でそんな事を言っていたらしいのだが、今ではそれも鳴りを響めている。恐らく、というか確実に父がナニカしたに違いない。

「だから笑ったん？おかしな人やなあ」

「自覚はしてるよ」

この遣り取りに小首を傾げている間に、後ろからつめき声が聞こえたので見やると、葛葉刀子が目覚めたらしく、調子が悪そうに頭を抑えていた。こうしている間も周りはどうしたものとアワアワ慌てている。正直もう少し落ち着こう。

葛葉刀子は目の前にいる僕が誰なのか良く分かっていないのか、暫くばやけた目で見てきたが、どうやら落ち着いたようで、その目をぱちくりとさせていた。

「あれ？」

「うん、どうも」

「あれ、あれ？え、え？」

「はいはい落ち着いてねー」

「あ、はい」

どうにも混乱しているらしく、妙に大人しい。  
そんな訳で。

「お久しぶり」

「ひ、おひさしぶりですえ」

僕は葛葉刀子と再会し、青山鶴子と出会ったのであった。

### 第三話

所変わってそこは関西呪術協会のとある一室である。和装作りに情緒のある襖、香る畳に遠くからししおどしの音が聞こえるなど、いかにもな場所でいい雰囲気。雰囲気は重要である。雰囲気によっては話したいことも話せないし、それが後々ともない事になりかねない事も十二分にありえる。そうして僕は僕の体のことも知つたし、少なくとも後悔はしてない。既知か無知なら僕は既知の方が良い。無知が悪い事とは言えないけれど、でも知らない辛い事だつてあるのだと思う。

「……んで、どうするのさ」

「とりあえず、菓子でもどうですか？」

「いや、まあもらっけどさあ」

僕は目の前に控えている青山さんに手渡されて茶菓子を一口にした。程よい甘さはなかなか美味であるが茶が無いので美味さも半減である。そういえば、今度青山さんが要家に来たら茶の一杯でも淹れてみよう。ではなくてだ。

「僕としてはそろそろ青山さんの用事も聞きたいんですけど」

「なんのことですしやるな」

「だって、父の頼みだけで外に出るって改めて考えたらおかしいと思う」

何てたって僕の病弱っぷりには定評があるし。体力的にも無理が利かない、直ぐ疲れる。日光も長い間当たっているのは辛い。日光浴なんて体に悪すぎる。お陰で僕の肌は真っ白だ。普通に女の子よりも白いぞこの肌は。そんな僕である。動悸息切れは慣れたもの、

なかなか外出できないのも仕方が無い事であるが、しかしそんな僕を連れて行くのは僕個人だけでは理由が足りないように思えるのだ。

「そんな事あらへんよ？御大の頼みが御影はんのためならうちかて人肌ぬぎますえ」

「青山さんを疑うわけではないけど、やっぱりそれだけなら弱いよね。たかが僕のため、ってどうにも考えにくいしさ」

そう言つと、青山さんは少し顔を顰めさせて「これだから御影はんは……」低く呟いた。どうやら僕の物言いが何やら彼女の機嫌を損ねたようだが、良く分からないので首を傾げるのみだ。

「全く御影はん、そういう事はあんまり言わないほうがええよ？」

……確かに、うちには御影はんには用があつた。でも、御大から要望があつたのはほんまですえ？これは忘れんとき

「うん」

「うちの用は二つ。それはほんまにうちの鶴子の姿を見てほしかったから」

「そもそもそれがわからないんだ。なんでそんな事を？」

「御影はんに近い歳の子を紹介しようつてのもあつたんやけどな、実はな」

そこで一つ青山さんは区切つて。

「鶴子と御影はんにくつついてもらおて話があるんよ」

「……へえ」

「騒がへんのね」

「だって、よくある話でしょ？」

名家同士での縁談なんて実際に良くあることだろう。何しろ青山と要家は関西呪術協会では知らぬ者はいないらしい家柄である。その二つの家柄が婚約をするのだから、如何にもという具合である。しかし、どうやら青山さんは僕の反応が面白くないようで何故か鼻白んでいる。

「……たしかに良くある話やけどな？でも、事はそんな簡単な話じゃないんよ」

「と、いいますと？」

「今、大きな戦争が遠くの方でやってて、そこに詠春はんがいつてもうたて話しましたやる？」

「うん」

「そこでな、少し青山がもめとるんよ。詠春はんは青山の宗主になるわけではないんやけども、青山の男が戦争で死んだらいう話ですえ。別に死ぬことが青山の恥ではないんよ？青山でそういうものやし。でもな、死ぬ死なないで考えたらやっぱり死なないほうがええ。でも、もし詠春はんが亡くなったらどないしますか、いう事なんよ」

あの人は殺しても死なないと思うけど、と僕は内心想った。何度か詠春さんとは会った事があるがやけに熱意に満ちた人だったし、正直暑苦しかった。そんなあの人が戦争で亡くなるのは、どう考えてもないだろう。何せあの人は青山詠春。それだけで充分死なないだろう。だけど、現実を考えたらやっぱり僕の考えなんて実にちっぽけなものである。

「今はあれですけども、前も大きな戦争が日本で起こって、正直関西呪術協会は力が失われとる。関東に近衛の長が赴いてから何とか融通利かせてもろてるけども、魔法使いが日本に入り込んでからと言うもの退魔士は衰退しよる。これはいかんやろって考えたんやけ

ども、そこで詠春はんが戦争にいきましたやろ？ここで青山が負け  
たとしたら、関西呪術協会に打撃が生じる。それを回避するために、  
青山はどうするかを考えて、それで結論が詠春はんが死んだ後、関  
西呪術協会に打撃が入る前に要と婚約を交わすべきではないか、と  
いう事ですえ」

「なるほどー」

「……話し、分かりましたえ？」

「なんとなく」

「ほんまに？」

「うん」

青山のネームバリューというものか。今どこかで戦争に参加して  
いるのだから詠春さんの背中には青山と、そして関西呪術協会の看  
板が背負われている事になっているのだ。そこで詠春さんが活躍す  
れば御の字、青山ひいては関西呪術協会のメンツが保たれる。しか  
し、もし彼が負ければ事態は深刻。青山は役立たずとして仕事が減  
るだろうし、関西呪術協会の信用も失われる。戦争とは良くも悪く  
も注目されるのだ。そこで活躍すればよし、出来なければ終わり。  
なかなか怖いものである。

「うちはこんな話しわかる言う御影はんが怖いわ」

「そう？」

「だって、御影はん今年で幾つになりましたえ？」

「六歳」

「ありえへんやろ。普通の六歳児がこんな話し聞いてもわけわから  
んよーになりますえ。鶴子やて今でもそこまで理解したらんやろう  
に」

ただ、打撃を受ける事態になった青山が要家と婚約を交わすこと  
で何が変わるのかと言うと、やはり関西呪術協会の結束力を高める

事だろう。名家同士ではあるが、要の名は伊達ではないのだという事もある。要家は近衛家と並ぶ家系であると教えられているが、もし本当にそうなら恩恵はあるはずだ。

「まあでも、大丈夫じゃないかな。詠春さんを待つてる人もいるし。あの人、期待は絶対に裏切らないでしょ」

実は詠春さんは近衛の女性とお付き合いをしているようで、恋仲である女性を置いて戦争に赴いたのだから、死ぬことなんて許されない。近衛と関係を持つことはそれだけで価値があることなのである。それを蔑ろにするなんてそれこそ青山の名が危うい。あれ？これむしろ詠春さん詰んでない？ま、いいか。あの人死ななければいいだけの話だし。

「それで、あと一つは？」

用件はこれ一つだけではない。

「ああそうやね、これも戦争の話になるんやけど、むしろこっちのほうの問題なんよ」

「ふーん。んで？」

「関東と関西は前々から小競り合いしてますやろ？それが戦争の余波で最近激しくなってるいう話。それがな、どうにもこちら側が押されている言うか。ぶっちゃけ負けるかもしれへんのよ」

関西が負けるとは穏やかではない。僕は少々の驚きを抱いた。彼らは鼻屑目にも、僕の中での最強である。それが負けるのか。

「そんなに？魔法使ってそこまで強いのか？」

「確かに錬度はなかなかなかなやけど、厄介なのが向こうの数が増

えることなんよ」

「増える？」

「向こうはなんや知らんけども、魔法使いの増援がひっきりなしにやってくる。魔法使いは色んなところにおるんや。んでも関西呪術協会はどうや？退魔士は関西にしかおらへん。力量ではこっちのほうが上回ってるんやけど、やっぱ数で負けるんよ。……戦争は数なんて、嫌なもん。それを超えるのが神鳴流やって話なのに、どうにも押されよる。正直かなわんかもしれへんて、皆の士気も下り坂。そんで今日は要家が視察に来たという事で気を引き締めさせたんや」

「そーなのかー」

ようするに将来的問題と現在の問題という事。確かにそれは問題だろう。その打開策として要の名前が必要なのだ。再度言うが要の名は伊達ではないのだ。関西呪術協会において近衛と名を列ねる旧家であり、また方針決定においても無視する事の出来ない存在なのだとか。ただそれは要の名前が必要だけであり、僕個人が必要とされていないのがこの話のミソである。

「申し訳あらへん。でも今の関西には必要な事なんや」

そう言っつて青山さんは頭を下げてくる。しかし決して後悔はしていないようだった。やはりこの人は強い。さすが青山さんである。でも。

「まあ、別に大丈夫でしょ」

「……なんでなん？」

「だって、そんなもんでしょ？」

苦笑と共に僕は言う。いわば僕の価値はそれぐらいのものはある

ということ。貧弱すぎて、もやしのような僕であるが、少なくとも誰かの役に立つ事はこれで証明されたようだ。さすが要である。しかし何故だろう、こんな僕の反応を見てやはり青山さんは顔を曇らせるのだ。僕が何をしたのだろうか。ふむ。

「そういえば、その話は青山鶴子には言っているんですか？」

「まだですえ。こんな話があるゆう段階の事やし、とりあえず御影はんには伝えとこと思て」

「なるほどねー」

「……こんなんでも、御影はんには氣い使ったんですえ？」

「いらぬ心配だね」

「まあ、……そうみたいやな」

そうしてから暫しの沈黙。

そういえば、氣になる事があった。実を言うと道場で僕達は稽古をざっと見た後すぐにここへ来たので、あの二人とは全然会話が出来なかつたのである。そういえばなぜかしら葛葉刀子が稽古の合間にちらちらと僕を見ていたが、一体なんだったのだろうか。その隙を突かれたから何度と無くぼこぼこにされていたのだが。

「そういえば、御影はん。なんで刀子はんを知ってたんや？」

「何でつて、前にあつたから？」

「どい？」

「……なんでそんな喰い気味なのさ」

「ええから、ええから」

「……いや、前に父の客人で葛葉の人が来たんだけど、その時にたまたま会つたのが葛葉刀子」

「へえ、葛葉もか」



なんだろう。青山さんの顔が少々鋭さを持った。今すぐにも舌打ちでもしそうな雰囲気である。気に入らない事でもあったのか、それとも葛葉と青山でなにかあったのだろうか。しかし葛葉刀子と会ったことが問題なのか、判断に難しい。

「それで？」

「いや。その時あっただけで、それから出会ってないけど」

別に会いたいとも思ってないし、溜め息が増えたのも気のせいだと思う。始めてであった子供だとか、そんなところである。しかし、あの時僕達は共にいて、一緒に遊んだのだ。遊びと言ってもあの家には蹴鞠も無ければ、独楽もない。遊びを知らない僕には必要の無いこと。遊ぶ道具が殆ど無いのだから、かくれんぼや追いかっこぐらいで、無理が祟って僕はあの後眩暈がしたものだ。でもあれは楽しかったと、はっきりと言える。

「なるほど」

「……と言っか、青山さん？どうしたんです？」

「っー」

僕の目の前で青山さんは立ち上がりすり足でもって襖に近づいている。本当に物音がしないのが凄い。先ほどまでの不機嫌は何処に消えたのか、どこか悪戯っぽい顔で襖に手をかけた。あの顔は見慣れている。青山さんが何かたくらんでいる顔である。

そして。

「えい」

「きゃっ！？」「おーっー」

襖を開けたら南下が飛び出してきた。折り重なって倒れるその姿は妙にコミカルであるが一人が驚いているのに対し、もう片方が全く普通なのがなかなか対比的だ。しかし、そこにいたのは僕にとっで見知った人たちであった。

「なにしてはるんや二人とも？」

まあ、そんな訳で葛葉刀子と青山鶴子であった。

「え、えええとえとえと」

「なんやお母様が面白そうな話ししてそうやったからー」

実に慌てている葛葉刀子に対して青山鶴子はにんまりと楽しげに笑っている。その表情から真意は読めない。表情から読めないなんて珍しいことだった。というか葛葉刀子があの時とはどうにも態度と言うか、色々と違うのだが。こんなキャラだったかこの娘。先ほどの再会の時もそうだったが、どうにも葛葉刀子は恥ずかしがっているというか、緊張しているというか。何故だ？

「あんさんら、どこから聞いたつたんや？」

「いーえ、今来たばっかですえ」

「ほんまにか？」

青山さんの問いに葛葉刀子は倒れたまま顔をぶんぶんと頷いている。なんか必死である。ちょっと面白い。と言うかこの二人何してるんだらうか。

「要の子がきとるんやからちゃんと挨拶せなあかんやろつなーて思つたんよな、刀子ちゃん？」

「そ、そうです」

本当だろうかとちょっと思ったが、しかし裏みたいなのは見えないし、なんだか葛葉刀子も真剣である。ここは助け舟を出す事ぐらいしておいてもかまわないだろう、と僕は内心嬉しく思いながら、青山さんに言葉をかけるのであった。

第三話（後書き）

口調が安定しない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3349r/>

---

泡沫の夢に伏し

2011年3月23日15時55分発行